

意図基盤意味論に基づく話者意味 の分析はなぜ誤っているのか*

三木那由他

概要

What is it for one to mean something by her behavior? Some philosophers have attempted to give the necessary and sufficient conditions of one's meaning something by her behavior, or of "speaker meaning." Intention-based Semantics (IBS), initiated by the philosopher Paul Grice, is so far the most and virtually only influential analysis of speaker meaning, according to which speaker meaning is reduced into speaker's intention. The purpose of the current paper is to assess the plausibility of IBS. Relying on counterexamples, the current paper shows that IBS does not give necessary nor sufficient conditions of speaker meaning. The problem of IBS is that it focuses solely on speaker's intention behind her behavior and ignores speaker's behavior itself, while speaker meaning should be explained in terms of the latter.

Keywords: the philosophy of language; speaker meaning; intention-based semantics; Paul Grice

1 はじめに

本稿は、話者意味 (speaker meaning) という概念に対する意図基盤意味論 (intention-based semantics) による分析を退けることを目標とする。これに取り掛かるために、少なくとも二つのことを説明しなければならない。すなわち、話者意味とは何であり、そして意図基盤意味論とは何であるかだ。

ひととときに、手を振る、音を発するなどという振る舞いによって、何かを意味することができる。こうした、「何かをすることで何かを意味する」という形で記述される行為のタイプが「話者意味」と呼ばれる^{*1}。通例、何かを意味する主体は「話者」と呼ばれ、何かを意味するためになされた話者の振る舞いは「発話」(utterance) と呼ばれる。ただし、ここで発話と呼ばれるものは言語的な

* CAP Vol. 5 (2013-2014) pp. 1033-1051. 受理日 2014.04.04 採用日 2014.07.24

*1 この用語はグライスに由来している (Grice 1957; 1967)。「話者の意味 (speaker's meaning)」や「発話者の意味 (utterer's meaning)」などとも呼ばれる。

発話には限られておらず、身振りなどもまた発話として捉えられる。

話者意味という概念の理解のために、簡単な例を挙げておく。あなたが花屋でサボテンの鉢植えを買うという場面を考えてみよう。あなたはむろん、「サボテンの鉢植えを下さい」などと言うことによって、自分がサボテンの鉢植えを欲しているということを意味することもできる。これは言語表現の産出が関わる、言語的な発話による話者意味の例となる。他方で、もしもあなたが喉をひどく痛めていて、声を出せないとしたら、同じことを意味するためにサボテンの鉢植えに人差し指を向けることもあるだろう。あるいは、サボテンのイラストを店員に見せることでも同様のことができよう。指差しやイラストは言語的な発話ではないが、これらもすべて話者意味の例となる。あなたは以上の三つのいずれの場合でも自分がサボテンの鉢植えを欲しているということを、それぞれの発話（文の産出、指差し、イラストの提示）をなすことによって意味している。

私たちが様々な行動によって何かを意味し、他者に影響を与えられるということ、これは人間のコミュニケーション的な活動におけるもっとも基本的な現象の一つである。それゆえ、いったい私たちが何かを意味するときにより正確に私たちは何をしているのかを理解すること、すなわち話者意味という概念の具体的な内実を調べ、可能であればそれをより基礎的な概念によって分析するということが一つの哲学的な課題として浮かび上がることになるだろう。グライス、シファーなどの本稿で取り上げる論者は、まさにこの問題に取り組んできた哲学者である。

一般に、ある概念を分析するときには、その概念が適用される必要十分条件を求めるという手段が取られることが多い。話者意味に関しても、誰かがその振る舞いによって何かを意味すると言えらるための必要十分条件を明らかにすることが、話者意味という概念の分析を与えると考えられている。意図基盤意味論は、そうした話者意味の分析に関するアプローチの一つを提供しており、しかもそれは現時点で広く知られている唯一のアプローチでもある。意図基盤意味論の中心的な主張は、話者意味は話者が発話時に持つ意図によって分析できるというものだ。すなわち、意図基盤意味論によれば、次のような形式の何らかの言明が成り立つ。

$(\forall S)(\forall x)(\forall p)$. [話者 S が x を発話することで p を意味する $\Leftrightarrow S$ が「…… p ……」ということ在意図して x を発話する]

そのうえで意図基盤意味論の論者たちは、この等式中の空白部分（「……」の部分）を特定することで、話者意味の必要十分条件を与えようとする。このアプローチには少なくとも二つの重要な特徴がある。第一に、話者意味にはそれと対応するタイプの意図の存在が想定されている。これは、単に話者が何かを意味するときには必ず意図的な振る舞いを伴っているなどという以上の強い主張である。すなわち、何かを意味する者が必ず持ち、かつそれを持っているならば何かを意味していると思なされる、そうした特定のタイプの意図が存在しているということが言われているのだ。第二に、そうした意図と話者意味とは、内容についても対応関係があるとされている。つまり、話者が何を意味しているのかは、発話の際に持たれる対応した意図の内容によって決まると考えられているのである。従って、話者意味の内容を特定するような内容を持つ意図を「内容特定の意図 (content-specifying intention)」と呼ぶとすると、意図基盤意味論による話者意味の分析とは、話者意味にとって必要かつ十分となる内容特定の意図の存在を前提し、その詳細を明らかにすることで話者意味の必要十分

条件を与えるアプローチであると言える。

ただし厳密に言えば、意図基盤意味論は話者意味の分析のみに関わる立場ではない。Grice(1957)が明確に打ち出しているように、それは言語的意味を含む様々な規約的な意味を専ら心理的概念のみを用いて分析する一種の還元的プログラムである。このプログラムは、規約的意味を話者意味という概念によって分析し、しかも話者意味を話者の意図という概念によって分析することで、間接的に規約的意味を話者の意図という概念によって分析するという形を取る。従って、本稿で取り上げる話者意味の分析は、こうした意図基盤意味論のプログラムの全体ではないが、重要な部分をなしている。

本稿で取り上げる文献の年代からもわかるように、意図基盤意味論が精力的に追及されたのは1960年代から1980年代のことであり、現時点ではそれほど活気のある研究分野ではない。現在この立場がそれほど論じられない理由の一つには、本稿でも取り上げる意図の無限後退の問題があるだろう。結局のところ、意図基盤意味論はこの問題を乗り越えることに成功してこなかったのだから。他方で、別の理由としてほかの立場が考え難いということもあるだろう。近年の論者によっても指摘されているように、「言語についての私たちの理解と実践を（相互理解やさまざまな伝達意図を経由して）命題的態度心理学へと還元するプロジェクトは、多くの哲学者にとって、公的言語存在者（public-language entities）にいかに関与性を与えられるのかということの説明の際の、巷にある唯一の哲学的計略と見えた」のである（Azzouni 2013, p. 3）。つまり、代案が思いつきがないがためにもはや積極的に批判されることもなく、しかし失敗し続けてきたがために積極的に追及されることもなくなった立場、それが意図基盤意味論なのではないかと思われる。意味とは何であり、表現や行為が意味を持つとはどういうことかを探究することは、私たちの日常の振る舞いを理解するうえでも、また言語学における意味論や語用論といった分野の営みを理解し、その基礎を明らかにするうえでも疑いなく重要である。にもかかわらず、意図基盤意味論という唯一もっともらしいと目されてきたアプローチが成功してこなかったがゆえに、その探究は停滞している。これは望ましい状況ではない。意図基盤意味論の何が結局のところ問題だったのかを改めて理解し、新しいアプローチの方向性を探す必要があるだろう*2。そして、これこそが本稿のテーマである。

本稿ではこれから、意図基盤意味論がその前提からして話者意味の分析に適していないということを主張する。すなわち、話者意味にとって必要十分な内容特定の意図というものが存在しないのである。これを主張するために、次節ではまず話者意味にとって十分な内容特定の意図は存在しないということを論じる。これだけでは、内容特定の意図に加えてさらなる何かを用いた、改良された意図基盤意味論の可能性までは否定されない。だが第三節では、話者意味にとって内容特定の意図は必要でさえないということを論じる。ゆえに、内容特定の意図は話者意味にとって必要でも十分でもない。従って意図基盤意味論の仮定は維持できないのである。さらにこれらの節での議論から得られる教訓をもとに、続く節では、意図基盤意味論とは異なるアプローチの取るべき方向性を探る。

*2 Davies(2003) や Azzouni(2013) は、それぞれの仕方で従来の意図基盤意味論とは異なる新しい見解を提出している。また Kissine(2013) は直接的に意味の分析を行っているのではなく、むしろ言語行為の一般理論を与えようとしているのだが、その理論はしばしば言語行為の理論と結び付けられがちな意図基盤意味論から距離を置いたものとなっている。しかしこれらの論者の議論は、新しい理論を与えるという点に重点が置かれており、意図基盤意味論の批判という点では徹底していない。そのため、本稿はむしろ意図基盤意味論の問題点に焦点を当てることで、こうした近年の論者における意図基盤意味論から離れようという動きを支持することを目指している。

2 内容特定の意図は話者意味にとって不十分である

本節では、話者意味にとって十分な内容特定の意図の存在を否定する。実のところ、意図基盤意味論にとっての話者意味の十分条件を与えることの困難はこれまでも繰り返し論じられてきた。そこでまずは、現在に至る議論の展開に沿って意図基盤意味論の陥った難局を解説する。この困難自体も意図基盤意味論にとっては無視できないものであるが、それだけでは内容特定の意図の不十分さをはっきりと示しはしない。そこで、さらに本節では、内容特定の意図がどのようなものであったとしても、それだけでは話者意味にとって不十分であると考えるに足る理由を与えるために、いくつかの例を提示する。さらにそれらの例をもとに、意図基盤意味論に何が欠けているのかを推測する。

2.1 意図の無限後退と自己言及的意図

意図基盤意味論に繰り返し指摘されてきた問題は、それが際限なく多くの意図を話者に帰属することになってしまい、現実味が乏しいというものである。この問題はもともとグライスの比較的単純な分析に対して提起されたものであるが、その後も有効な対処法が見出されずにいる。数少ない例外としてハーマンによる自己言及的意図を用いた解決があるが、後述するように、この提案もまたもっともらしくないという点では引けを取らないように思われる。状況はこうである。意図基盤意味論は、ある一群の反例の存在によって、無限に多くの意図を話者に帰するか、もしくは特殊な自己言及的意図を話者に帰するかという二者択一を迫られている。そして、そのいずれももっともらしくない。それゆえ、意図基盤意味論は疑わしい。本節では、この問題を概観しよう。

2.1.1 グライスによる基礎的分析と意図の無限後退問題

まずはすべての出発点となるグライスの分析を見ておこう。グライスは「話者 S は x を発話することで p ということの意味した」という言明の必要十分条件を次のように考えた (Grice 1957; 1967) (簡略化のために、命令法的な事例を無視し、直説法的な事例にのみ注目する)。

ある聞き手 A について、 S は次のことを意図して x を発話した：

- (1) A が p と信じる、
- (2) S が意図 (1) を持っているとき A が気づく、かつ
- (3) S が意図 (1) を持っているとき A が気づくことが、 A にとって自分が p と信じる理由の少なくとも一部である。

いま芽衣と純という二人がいたとしよう。純は芽衣を食事に誘っている。芽衣はそれを断りたいと思っている。そこで芽衣は「また今度にしよう」と口にする。そうすれば、芽衣が食事に行く気がないと純は信じるようになるだろうし、またそのように信じさせようと芽衣が意図していることにも気づくだろうし、さらにそのように気づいたがゆえに純は芽衣が食事に行く気がないと信じるようになるだろう。そして実際に芽衣はそのようなことを意図して言葉を発している。グライスによれば、こ

のとき芽衣は、自分は食事に行く気がないということを意味している。また逆に、そうしたことを意味しているというためには、芽衣は上記のような意図を持っていないなければならない。

このグライスの分析は、確かに私たちの直観のある部分をうまく捉えているように見える。実際、私たちは、日常の会話の場面などで何かを意味するときには、上述のような意図を持っていると感じられるだろう。だが、この分析は決して十分ではない。ストローソンは以下のような議論によって、それを指摘している（強調は原著者）。

S はある行為によって、 A に p という信念を生じさせようと意図している。ゆえに [条件 (1) を] 満たす。 S は、 A が見ているところで、 p であるということを説得的に示すような「証拠」を配置する。このようにしながら、 S は A が自分のこの作業を見ているということを知っており、しかしまた A が S の作業を見ていると S が知っているということを A は知らないということもまた知っている。 A が配置された「証拠」を p ということを示す本物の証拠や自然な証拠とは受け取らないと S は気づいており、けれども S がそれを配置しているということを根拠として、 S が A に p という信念を生じさせようとしていると A が考えるであろうということにも気づいており、しかもそれを意図しているのである。それゆえ S は A が自分の [意図 (1)] に気づくよう意図している。ゆえに S は [条件 (2)] を満たす。 S はまた、 S は自分が p と知っているのではない限り A に p と信じさせようとはしないと考えるより一般的な根拠を A が持っている知っている。そのため、 S が A に p という信念を引き起こそうと意図していると A が気づいたなら、それは A にとって実際に p と信じる十分な理由と受け取られる。そして S は自分の [意図 (1)] を A が認識することが、まさにこうした仕方でも機能するべく意図している。それゆえ S は [条件 (3)] を満たす。(Strawson 1964, p. 120)

この場合、 S はグライスの分析に現れるすべての意図を持っているものの、この事例はグライスの分析が適用されるであろうコミュニケーションの事例とはなっていないとストローソンは指摘する。すなわち、上記の条件を満たした話者は、グライスの分析に現れる意図を持ちながらも、発話によって何かを意味しているとはいいがたいのである。

先ほどの芽衣と純の二人にまた登場いただく。今回も純は芽衣を食事に誘っており、芽衣はそれを受ける気がない。ただ、以前と違って、芽衣は何も口にせず、部屋から出て行くとしよう。部屋を出た芽衣は、純がこっそりと自分の様子を伺っているのを知りつつ、電話を取り出す。電話口で、芽衣は言う。「今日これから一緒に出掛けるということにして、純にもそれとなく私たちが出掛けると知らせてくれない？」と。これにより、自分に食事に行く気がないということを純に信じさせようと芽衣が意図していることに純は気づくだろう。そして、そのように信じさせようと意図している以上、実際に行く気がないのだと結論するだろう。少なくとも、そのように芽衣は意図してこの電話への話しかけを、あえて純に聞かせているのである（芽衣は、実際に誰かに電話をかけても構わないが、単に電話越しに話しているふりをするのでも構わない）。このとき、芽衣はグライスの分析中に現れる三つの条件をすべて満たした意図を持っている。しかし、電話へ上記のように話しかけることによって、芽衣は自分が食事に行く気がないということを意味したと言えるだろうか？ 確かに芽衣は何らかの意味でそのようにおわせてはいるだろうが、それを意味したとまでは言えないというの

が、私たちの直観的な理解だと思われる。それゆえに、こうした事例は、グライスの分析に対する反例となる。

実のところ、この反例そのものに対処するのは難しいことではない。先の例では、芽衣は確かに純が自分の第一の意図に気づくよう意図しているが、しかし自分の第一の意図に純が気づくように意図しているということまでもが純に気づかれるようには意図していなかった。すなわち、芽衣の意図として純が認識するよう意図されていることと、実際に芽衣が持っている意図とのあいだにずれが生じているのである。そしてこのずれこそが、この例を話者意味の事例として分類することを私たちに躊躇わせているのだと考えられる。だとすれば、この種の反例を排除するには、話者は自分が聴者にしかじかの信念をもたらそうと意図しているということを聴者に気づかせようと意図しているのみならず、それを気づかせようと意図しているということもまた聴者に気づかせようと意図していなければならないという新たな条件を課すればよい。これにより、先の反例は話者意味の事例に含まれないことになる。

問題は、これがある種のいたちごっこへの第一歩であることである。このことへの懸念はすでに Strawson (1964) に見られ、Grice (1967) でも言及されており、後に Schiffer (1972) において大々的に取り上げられることとなる。どのような問題が生じているのかを見ていこう。前段落で述べたように、確かに先の反例自体は次のような意図を話者が持っているという条件を分析項に加えることで排除される。

(4) S が意図 (2) を持っている と A が気づく

だが、実はこの意図 (4) についても先の例と同様の反例を作ることができるのである。つまり、この意図 (4) を持ちつつ、意図 (4) を持っている と聴者に気づかせようとは意図していない話者を想定することで、四つの条件をすべて満たしつつ話者意味には分類されないような行為を話者がなしているという事例を構築することができる。この反例構築の手順が、以前に見た電話に向かって話す芽衣の事例を構築する際の手順と一致していることを見て取るのはたやすい。一般に、グライスの分析やそれに対する上述のタイプの修正に対して、次の仕方で反例を作ることが原理的に可能である*3。

これまで見てきた形式に従った話者意味の分析が与えられたとき、分析項で言及され、かつ「意図 n を持っている と聴者が気づく」という意図が話者に要求されていないような意図 n に対し、話者が意図 n を持ちながらも、意図 n を聴者に気づかせようという意図は持っていないという事例を考えたなら、分析項に現れる条件を話者がすべて満たしていたとしても、それは話者意味の事例とはならない。

一見してわかるように、この反例構築とそれに対処するための分析項の修正との応酬は、理論上は無限に続くことになる。意図 n を聴者に気づかせよう と話者が意図していないがゆえに生じる反例に対して、意図 n を聴者に気づかせよう という意図 $n+1$ を話者に要求するように分析を修正したな

*3 この議論は Schiffer(1972) に依拠している (p. 23)。ただし、本稿で述べているような仕方で、反例構築の一般的手順が明示的に述べられているわけではない。

ら、即座に意図 $n + 1$ に関連して同様の反例が作られ、今度は意図 $n + 1$ を聴者に気づかせようという意図 $n + 2$ が分析項に導入され、……となってしまうからだ。以降、本稿ではこの手段で構築された反例を「騙し」の事例と呼ぶことにする。

むろん、実際にはこの仕方でも構築した反例も、それへの対策も、すぐに直観的には理解が困難なほど複雑になってしまうため、現実的には無限に多くの反例が作られることはないだろう。例えば Schiffer(1972) には、ストローソンのものより高次の意図に関わる反例がいくつか挙げられているが、それも即座には理解しづらいものであり、それよりもさらに高次の意図に関わる事例となると、多くのひとは途方に暮れるしかないだろう。だが、これは問題とはならない。というのも、この限界はあくまで私たちの記憶力や理解力が限られているという偶然的な事情によるものであり、意味という概念そのものの分析とは切り離された問題であるからだ。重要なのは、現実の私たちには理解ができないとしても、論理的に無制限に反例が存在することである。

さて、グライスのもともとの分析の方針を維持するならば、このようにして延々と生じる反例に対処するために、無限に多くの意図を話者に要求しなければならないだろう（この問題は、しばしば「意図の無限後退の問題」などと呼ばれる）。しかも単に無限に多くの意図というだけでない。上記の方法で構築された反例をすべて排除するためには、話者は意図に関する意図、意図に関する意図に関する意図、意図に関する意図に関する意図に関する意図…… というように、次第に高次になっていく無限に続く系列の意図をすべて持たなければならない。単純な意図であれば、私たちは実際に無限に多く持っていると言えるかもしれない。信念に関して言えば、私たちが真だと前提している事柄をすべて私たちの信念に数え上げた場合、その数は際限なく多くなるだろう。だとすると、意図に関して、同様の仕方でも無限に多くの意図を私たちが持っているということはあり得ないと言いきれない。だが、グライスの分析に突きつけられるのは、明らかにそれ以上のものである。仮に私たちが単純な意図を無限に多く持つことができるとしても、だからといって各々が一つ前の意図を内側に埋め込む、無限に続く意図の系列のすべてを持つことができるということにはならないし、実際そうした意図の系列を私たちが持てることは考え難い。それゆえグライス自身も含め、多くの論者はグライスのオリジナルな分析は、この問題ゆえに失敗していると考えている。

しかし、グライスによるもっとも基本的なタイプの分析が失敗に終わったとしても、それは決して意図基盤意味論そのものの失敗を含意するわけではない。グライス、シファー、ハーマンは、それぞれの仕方でも新しいタイプの意図基盤意味論的な話者意味の分析を提案している。順に見ていこう。

2.1.2 提案 1：騙し意図の排除

グライスが提出し、後にニールも同意した修正案は、上記の方法に従った反例を生じさせるような騙しを話者に禁ずるといったものであった (Grice 1967; Neale 1992)。すでに述べたように、問題のタイプの反例は、聴者が認識するように話者が意図しているような話者の意図と、話者が実際に持っている意図とのずれがもとに生じていた。ならば、こうしたずれを一般的な仕方でも禁ずることができたなら、問題は生じないだろう。グライスはこうした発想のもとで、次のような条件を話者意味の必要条件に加えることを提案した (Grice 1967, p. 104, ただし表現を修正している)。

S が次の双方を意図しているような、推論要素 E は存在しない：

- (1') A が E に依拠して、 p と信じるに至る、かつ
 (2') S は (1') が偽であるべく意図していると A は信じる。

ここで述べられているような推論要素が存在している場合の話者の意図を「騙し意図」と呼ぶことにしよう。一見して分かるように、上の条件は率直な仕方で、話者意味の場面において話者が騙し意図を持つことを禁じている。話者が騙し意図を持たなければ騙しの事例は成立しないとすれば、この条件によって騙し事例は排除できるだろう。

しかし、シファーが指摘するように、話者が騙し意図を持っておらずとも騙しの事例は成立する (Schiffer 1972, p. 26)。というのも、話者が反例を生じさせるような仕方で聴者を騙すためには、上記の条件における (2') で述べられていることを聴者に信じさせようと意図する必要はないからである。実際、以前の例に出てきた芽衣は、確かに電話での会話を盗み聞きさせることで純に一定の信念を生じさせようと意図しているし、この意図が純に見破られることは意図していない。だが、だからと言って、電話での会話によって問題の信念を純に生じさせまいと意図しているという信念を純に生じさせようと意図している必要はない。芽衣は単に、その点については何も考えておらず、気に留めていないということもありうる。ポイントは、一般的にあるひと A が別のひと B に p ということ信じさせようと意図していないということから、 A が B に p ということ信じさせまいと意図していることは帰結しないということである。 A は B に p ということ信じさせようともさせまいとも意図していないこともありうるのである。それゆえ、グライスが与えた条件では、騙し事例を十分に排除することはできない。

こうして、騙し意図の排除による分析の修正は、そもそも話者は騙し事例において騙し意図を持っているとは限らないという点で、問題を何ら解決していないということになる。シファーはこの困難をまったく別の手段で解決しようとしている。シファーによる発想の転換はこのように述べることができる。話者意図の場面において、話者は聴者を騙しては決して達成できない何かを達成しようと意図していなければならない。グライスはあくまで話者の主要な意図は聴者に信念をもたらすことだとしたうえで、いくつもの補助的な意図を話者に課することによって話者意味の分析に達しようとしていた。シファーのアイデアは、話者の主要な意図はそもそも単に聴者に信念をもたらすというようなものではなく、もっと複雑で、しかもそれを達成しようとしたならば絶対に聴者を上の例のような仕方で騙すわけにはいかない何かなのではないかというものだ。次節では、シファーのこうした提案を見ていく。

2.1.3 提案 2：相互知識*への意図*⁴

シファーの修正案は、「相互知識*(mutual knowledge*)」という概念に基づいている。大まかに言えば、話者は単に聴者にある信念を生じさせようと意図しているのではなく、むしろ自分がそうした意図を持っているということを話者と聴者のどちらにとっても明白なものにしようと意図しているの

4 「」はシファー自身の表記に従って付けられている。素朴な理解のもとでの単なる知識ではなく、理論的に定義された概念であることを明示するためだと思われる。

だ、そうシフアーは考えている。

まずはシフアーによる相互知識*の定義を見ておこう。

S と A が p ということを相互に知っている* iff
 S は p ということを知っている、かつ
 A は p ということを知っている、かつ
 S は A が p ということを知っている*と知っている、かつ
 A は S が p ということを知っている*と知っている、かつ
 S は A が S が p ということを知っている*と知っている*と知っている、かつ
 A は S が A が p ということを知っている*と知っている*と知っている、かつ
 ⋮
 (Schiffer 1972, p. 30)

この定義により、二人の人物が p ということを相互に知っている*場合には、 p ということについて両者に認識のずれは生じえない。このことこそがシフアーがこの概念を導入する眼目なのである。

相互知識*という概念は、一見すると非現実的なものに見えるかもしれない。だがシフアーによれば、相互知識*は私たちの日常において、実際にしばしば成立している、ありふれたものである。シフアーの挙げている例は、二人の人物があいだに蝋燭を挟んで向かい合っているというものだ (Schiffer 1972, p. 31)。互いが標準的な視覚能力を持っており、かつ互いが普通の人間であり、しかも目を開いた状態で蝋燭を前にしていると知っている場合、それらの知識を前提とする限り、この二人は自分たちの前に蝋燭があるということを容易に相互に知る*ことができる。この例からもわかるように、シフアーが相互知識*の概念によって捉えようとしているのは、いわばその場にいる人々が自然と共有しているような事柄、その場にいる人々にとって明白な事実とでも言えるものである。

相互知識*の概念を用いて、シフアーは話者意味の分析として次のものを提案する。Schiffer(1972; p. 58) をもとに、本稿の議論に関わらない部分を簡略化してまとめる。

- S はそれによって次のようなある事態 E を実現しようとして意図して x を発話した：
- (A) E の成立は、 S とある聴者 A にとって、 E が成り立っているということが相互知識*となるのに十分である、かつ
- (B) E の成立は、 S と A にとって、 S が以下の三点を意図して x を発話したということの決定的な証拠に E がなっているということが相互知識*となるのに十分である：
- (1) S の発話をもとに、 A が p という信念を生じさせるような何らかの理由がある、
 - (2) (1) が実現するのは、少なくとも部分的には、 x がある仕方によって p という信念と結びついていると A が信じているためである、かつ
 - (3) E を実現する

この分析によれば、話者意味の場面において、話者はある事態 E を実現しようとしており、しかも E が成り立ったなら、話者と聴者のあいだでは、 S がある信念を A に引き起こそうと意図して発話

を行ったということが相互知識*となる。この分析では、もはやグライスを悩ませた騙しの反例は生じないように思える。なぜなら、騙しの事例を構成するのは、何よりも話者の意図に関する、話者の知識と聴者の知識のずれであったからだ。相互知識*が成り立つ場合には、こうしたずれは生じようがない。

だが、この分析でもなお十分とは言えないとハーマンは指摘する (Harman 1974, p. 227)。相互知識*という概念を持ち出すのは優れた着眼点と言うべきだが、問題はそれが分析項において話者の意図の内側に埋め込まれていることである。ハーマンによれば、シファーの分析で述べられているような事態 *E* を実現しようと意図しつつ、けれどもそうした意図を持っていると聴者に気づかれまいとしている話者を想定することで、結局グライスの場合と同様の反例が生じてしまう。もちろん、実際にそうした反例を構成したなら、それは非常に複雑で理解が困難なものになるであろうし、ハーマンも実例を挙げているわけではない。だが原理的にそうした例は可能である。そして聴者が認識するよう意図されている話者の意図と実際に話者が持っている意図とがずれている以上、そうした事例は騙し事例となり、騙し事例は話者意味の例とはならないというグライスやシファーの見解が正しいならば、たとえ実際に理解可能な反例を作るのが難しくとも、確かに理論上の問題は生じていると見るべきだろう。少なくとも、論理的にはシファーの分析は本人が排除しようと試みている例を許容するものとなっているのだ。

シファーの分析は込み入ったものであるため、一度この節の内容をまとめておくのがよいだろう。シファーは相互知識*という概念を持ち出し、話者意味の場面においては、話者の意図に関する相互知識*を成り立たしめる事態を実現しようという意図を話者は持たねばならないと論じた。ハーマンの主張は、相互知識*を成り立たしめる事態を実現しようという意図そのものに対して、従来と同様の手法で騙し反例が論理的に可能であるというものである。もしも話者意味の妥当な分析のために、2.1.3 節の方法に基づく反例の可能性がすべて排除されなければならないのであれば、この論理的な可能性だけでもシファーの分析が不十分であると示すに足るであろう。

ハーマンの指摘は、意図基盤意味論にとって一つの重大な障壁を突き付けている。意図基盤意味論は、話者が発話時に一定の意図を持っていることと話者が何かを意味することを同一視する立場だった。しかし、その意図の中身をどれほど精緻にしようと、そのもっともスコープの広い意図に関して、私たちは 2.1.1 節の方法に従って反例を構築することが論理的に可能である。グライスとシファーの提案、そしてその失敗から、私たちは意図基盤意味論が直面している困難を明確化することができる。グライスの失敗は、ある種の意図を話者に禁ずるという方針で騙しタイプの反例を排除することはできないということを示している。それゆえ、意図基盤意味論を維持するには、話者がどういう意図を持っていないかではなく、話者がどういう意図を持っているかを述べることで騙しタイプの反例を排除しなければならない。しかしシファーの失敗が示すのは、話者が持っている意図をどれほど精緻なものとしたところで、そのもっとも広いスコープの意図に関して騙しタイプの反例を作ることができるということである。意図基盤意味論は、話者がどういった意図を持って発話を行うかを分析することで話者意味の必要十分条件を与えようとする。しかしそれがどんな意図であれ、話者がそれをもちつつそのことを聴者に知らせようと意図していないことは基本的に常に可能であるように思えるのである。

こうして意図基盤意味論は立ち往生する。だがここでハーマンは別のアイデアを提案する。いま、どんな意図であれ、それを持ちつつその意図を聴者に知らせようと意図していない話者が想定可能であるように思えると筆者は述べた。果たしてそれは本当なのだろうか。もしかしたら、そのようなことが不可能となる特殊な形式の意図があるのではないか。ハーマンが指摘するのは、まさにこのことである。

2.1.4 提案 3：自己言及的意図

ハーマンによれば、意図の無限後退の問題が生じるのは、話者意味の分析項において話者に帰せられる任意の意図 n に対し、次のような意図 $n+1$ の帰属もまた求められるためだ (Harman 1974, p. 225)。

($n+1$) S の意図 (n) が、少なくとも部分的には、 A が S の意図 (n) に気づいたがゆえに実現される

すなわち、ある意図が、それ自身が聴者に気づかれることが理由となって実現されるという自己言及的な構造を、より高次の意図において反映することが必要とされてきたのである。だとすれば、そもそもそうした自己言及的な構造を問題の意図そのものの内容に組み込んでしまえば、もはやより高次の意図は不要となり、無限後退問題は生じない。これがハーマンの提案する解決策である。

ハーマンによれば、何かを意味する話者は、「[聴者]にある反応 r をまさにこの意図に [聴者] が気づくことによって引き起こすということを意図している」(ibid.)。ハーマン自身は意味される内容の特定に踏み込んでいないため単に「ある反応」としているが、これを本稿の議論に合わせると、ハーマンの提案する分析は次のような条件を、 S が x を発話することで p ということの意味するのに十分であると見なすものとなるだろう。

S は、まさにこの意図に A が気づくということが少なくとも部分的に理由となって、 A に p という信念が生じることを意図して x を発話した。

ハーマンは、グライスやシファーはこうした自己言及的な意図を避けようとして問題を複雑化してきたと見ている。だがハーマンによると、意図基盤意味論はいまやある二者択一に直面している。すでに見てきたように、シファーの相互知識*のような概念を使ってさえ、意図の無限後退の問題は避けられない。ハーマンの言うように、意図基盤意味論が意図の無限後退問題を避けるために自己言及的意図を必要としているとすると、意図基盤意味論が取りうる道は二つに絞られる。上記のような自己言及的意図を避けて意図の無限後退を認めるか、あるいは意図の無限後退を避けて自己言及的意図を認めるかだ。ハーマンが推奨するのはもちろん後者の道である。だが、この自己言及的意図による解決は受け入れ可能なものなのだろうか。

デイヴィスのような論者は冷淡である。彼はハーマンのこの提案について「そうした意図は文字通り理解不可能に思える」と述べる (Davies 2003, p. 88)。デイヴィスによると、そのような意図を持つためには自己言及的な文によって表現されるような事態の実現を意図しているのでなければならないが、そもそもそうした事態は理解可能なものではなく、それゆえにそのような意図を持つということも理解しがたい。だが、もちろん単に理解しがたいというだけでは、ハーマンの提案を退けるのに

十分ではない。またそれだけでなく、サールが論じているように私たちの意図はそもそも一般的に自己言及的な側面を持っている可能性がある (Searle 1980)。サールによれば、例えば私たちが自分の手を挙げようと意図する場合、私たちはその行動がまさに自分の意図によって生じることを意図している。例えばあなたが手を挙げようと意図していて、実際にあなたの手が上がった場合であっても、仮にその挙手があなたの意図とは無関係に何らかの外的要因によってひきおこされていた場合、それによって手を挙げようというあなたの意図が実現したとは考えられないだろう。従って、行為への意図は基本的に「まさにこの意図によって」という自己言及性を含む。それゆえ、意図が自己言及性を持つということ自体は、たとえそれが理解困難であったとしても、大きな問題とはならない。それゆえ、単に自己言及性ゆえに理解が困難であるというだけでなく、ハーマンが持ち出すような種類の自己言及的意図が特に持つ困難を指摘しなければならない。

だが、そうした困難は実際に存在する。問題は、ハーマンの分析において意図への自己言及は単に問題の意図の内部に埋め込まれているだけでなく、聴者にとっての信念が生じる理由を述べる部分に埋め込まれているということである。それゆえ、問題の意図は意図の実現そのものに因果的に寄与するというより、聴者の信念形成に寄与しているのでなければならない。実際のところ、ハーマンの分析における話者の意図が実現されるためには、聴者には次のようなことが求められることになる。

まさにこの意図に A が気づくということが少なくとも部分的に理由となって、 A に p という信念が生じることを S が意図しているということが少なくとも部分的に理由となって、 A に p という信念が生じる。

さて、「理由となる」ということをどのように解釈するかはそれ自体が難しい問題だが、「 p が q と信じる理由になる」をおおよそ「 p が真であると信じ、かつそのことから q が真であると信じることに帰結する」と取るのはおかしいことではないだろう（「帰結する」を緩やかに理解して）。だとすると、この場合の聴者は、「まさにこの意図に A が気づくということが少なくとも部分的に理由となって、 A に p という信念が生じることを S が意図している」という文で表される自己言及的な命題を真だと受け入れているということになる。しかし、いったいどのような手段によって、話者はこのような命題を聴者に信じさせることができるのであろうか。自分自身の意図だけの問題であれば、サールの言うように、基礎を持たない自己言及的な内容を持っていても構わないだろうし、むしろそれが普通でさえあるかもしれない。だが、自分以外の他者に自己言及的な内容の信念を生じさせるということがいかにして可能なのだろうか。ハーマンの分析の問題点は、話者の意図が自己言及性を持つことではない。むしろ、問題の意図を実現するためには、自己言及的な内容を含む信念を聴者に持たせなければならないということである。そのようなことを可能にする方法は明らかではないし、仮に何らかの仕方でもそのような自己言及的な信念を他人に与えることが可能であるとしても、それは私たちが何かを意味する場合に常に成り立つようなありふれた事柄などではないだろう。

ハーマンの自己言及的意図に基づく分析がもっともらしくないとすると、意図基盤意味論は窮地に追いやられる。ハーマンの議論が正しければ、意図基盤意味論は意図の無限後退を受け入れるか自己言及的意図による分析を受け入れるかの二者択一に直面しており、しかも第一の選択肢は実質的にこれまで否定されてきたものである。そしていまや第二の選択肢もまた問題を抱えていることがわ

かった。

グライスには後に、意図の無限後退を実質的に受け入れる道を選んでいる (Grice 1982)。グライスによると、厳密な意味で話者が何かを意味するためには、話者は無限に多くの意図を持っていないなければならない。これは「最適の状態」ではあるが「原理的に実現不可能」なものでもある (Grice 1982, p. 302)。しかし、私たちが現実世界には完全な円が存在しないにもかかわらず多くのものを円形と見なすように、現実世界では話者意味は実現しないにもかかわらず、あるひとが「この実現しえない条件を満たしている」と見なすのが正当である、あるいはもしかすると必須でさえあるような状況におかれる」ということがある (ibid.)。このアイデアは興味深いものであるが、同時に不明瞭なものでもある。仮に話者意味を実現不可能な理念として解釈し、現実においては厳密には話者意味ではない不完全な振る舞いを、私たちは話者意味と見なしているとしよう。この場合でも、私たちの振る舞いが話者意味の事例に見なされる基準は何なのかという問題がある。もしもそのような基準が文脈によって異なりうるのであれば、実質的にあるひとが何かを意味しているかどうかは文脈に相対的な問題となるが、それが意味という現象に関して持つ私たちの理解や、あるいは意味という現象を取り扱う様々な分野の想定と整合的かどうかは明らかではない。そしてもしもそうした文脈相対性を認めないならば、ある行為が話者意味と判断される基準を巡って、これまでの話者意味に関する議論と実質的に同じ問題が生じるだろう。

本節では、意図基盤意味論を巡って生じる意図の無限後退の問題と、それに対してこれまで提案されてきたアイデアを批判的に見てきた。意図基盤意味論は無限後退を受け入れるか、何らかの仕方で分析を改良するかのいずれかを必要とするが、後者についてもっともらしい見解は存在しておらず、前者はまだ選択に耐えるほど十分に考察されていない。だが、これらはいずれも、本稿で紹介してきたような代表的な見解では不十分であることを示すのみで、意図基盤意味論がそもそも誤っていることを示しているわけではない。次節では、意図基盤意味論がより根本的な点で不十分であるという指摘を行う。

2.2 意図基盤意味論へのさらなる反例

本節では、意図基盤意味論は根本的に不十分であると指摘する。問題は、それが発話そのものがどのようなものであるべきかへの言及を欠いている点である。

もちろん、発話の持つ特徴というものが完全に無視されてきたというわけではない。実際、グライスは話者意味の分析を洗練させていく途上で、「発話の特徴」という概念を持ち出している (Grice 1967, pp. 103-104)。しかし、それはあくまで話者の意図の記述に用いられている。グライスは次のような条件を話者意味の分析項に加えるのである。

話者 S は発話 x が特徴 f を持つと聴者 A が思うことを意図して x を発話した

発話の持つ特徴というものに着目しつつも、それをあくまで話者の意図の記述に埋め込むというやり方は、Sciffer(1972)でも変わらない。

さて、次のような例を考えよう。樹里は不幸にして事故にあい、体をまったく動かさなくなってし

まった。しかし、樹里にははっきりとした意識があり、思考を行うことができる。樹里は以前に、全身不随になりながらも瞬きでコミュニケーションをとって本を執筆した人物の映画を見ていたため、同じ方法で周りの人間と会話しようと思いつく。樹里の計画はこうだ。看護師が自分をのぞき込んでいるときに、特徴的な速さで瞬きをする。それにより、看護師がその特徴に気づき、樹里が自分に思考能力があるということを看護師に信じさせようと意図していることに気づき、それゆえに実際に樹里に思考能力があると看護師が信じることを、樹里は意図しているのである。このとき、グライスの基本的な分析における条件も、上記の発話の特徴に関する条件も満たされている。必要とあらば、シファールの分析やハーマンの分析を満たすように状況設定を加えても構わない。重要な前提は次のものである。樹里は自分が意識的に瞬きを制御できると信じており、実際に瞬きをしている際にもそれが自分の思うままになされていることだと信じて疑っていない。しかし樹里の状態は件の映画の主人公よりさらに悪く、実は瞬きも樹里の意識的な制御を完全には受け付けていないのである。瞬きをしようと思えば、その意図に基づいて確かに瞬きは生じる。だが、速さやタイミングは制御できず、それは樹里の思っているような特徴的な瞬きにはなっていない。また、瞬きを意識的に止めるということは、現在の樹里には困難である。結果的に、樹里が上記の意図のもとで行った瞬きには、通常の瞬きと区別できるような特徴が何ら備わっていない。この状況で、樹里は看護師の前で、上述したすべての意図を胸に、瞬きを行う。

樹里の瞬きは、既存の意図基盤意味論のいずれの見解に照らしても、自分が思考能力を持っているということを意味してなされたことになる。とりわけこのとき、樹里は自分の瞬きが一定の特徴を持っていることを意図している。しかし、その瞬きは実際には不随意的な瞬きと区別可能な特徴を何も持っていない。このとき、確かに樹里は何かを「意味しようとした」とは言えるかもしれないが、しかしその試みは失敗しており、樹里はこの瞬きによって実際には何も意味できてはいないと直観的に判断されるだろう。

さらに空想的な例を考えることもできる。今度は、樹里は事故に遭っていない代わりに、非常に奇妙な信念に取りつかれている（ただし、奇妙かつ誤った信念を抱いているだけで、それ以外の点で樹里は完全に合理的な知的にも問題のない人間である）。それは、友人の葉月が超能力者であり、樹里の心理状態を常に読み取っているというものである。そこで樹里は、自分がそのことに気づいているということを葉月に信じさせようと意図しつつ、普段と何も変わらない仕方でペットボトルの蓋を開ける。樹里は、自分のその振る舞いが、上記のような意図のもとでなされたということを、まさにその特徴とするものであることを意図しており、さらに普通の聴者には気づかれえないこの特徴が葉月にだけはその読心術ゆえに気づかれるということを意図している。また、樹里は意図基盤意味論の論者たちが分析項に挙げるような種々の意図も持っている。このとき、ペットボトルの蓋開けによって樹里は何かを意味したと言えるだろうか。直観的には、樹里がペットボトルの蓋開けという行為によって何かを意味したとは思えないだろう。樹里はそれによって何かを意味しようとしたかもしれない。しかし、樹里によるペットボトルの蓋開けという行為は無意味なのである。

これらの例をもとに指摘したいのは、「ある発話によって」何かを意味するというときに、その発話が他の行動と区別可能な特徴を何ら備えていないというのは不合理であるということだ。もしも話者の発話が他の無意味な振る舞いと区別できないとしたら、そうした発話は有意味なものとはなりえ

ないだろう。

もちろん、これらの例に関しては直観が分かれるかもしれない。上記の例に対しても、「これらの例でも、確かにその発話によって何かを意味していると言える」と述べるひともあるだろう。意味という概念も、またその概念に関する直観的判断も、一枚岩ではない可能性は十分にある。もしも意味に関する直観が分かれる、あるいは意味という概念自体が多様でありうるとしたら、問題となるのは、そのうちのいずれが分析するに値する重要性を持つかであろう。

この点に関連して、話者意味という概念と既存の言語研究との関係は注目に値する。話者意味の概念はそれ自体でも興味深いものではあるが、それ以上に語用論のような研究分野で重要なものとなっているのである。例えば関連性理論は現代の語用論における一つの主要な立場であるが、その創始者であるスペルベルとウィルソンは「語用論者の想定するところでは、発話によって伝達されることというのは話者の意味である」と述べている (Sperber & Wilson 1995, p. 56)。むろんこれがすべての語用論者に共有されている考えではないかもしれないが、語用論の目標を発話において話者が意味することがいかに決定されるか、あるいは聴者によっていかに推測されるかを突き止めることと捉えるのは、的外れではないだろう。そしてその際に語用論の研究では、話者の発話が担う情報、とりわけ言語的な情報が、どのように話者がその発話によって意味することの全体と関係しているかが問題となる。つまり、発話が実際に持っている特徴が、話者の意味とどのように関係しているのかということが重要な課題として扱われているのである。これは関連性理論に限られた話ではなく、例えば言語的発話がデフォルトで持つ語用論的内容に着目するレヴィンソンの GCI 理論などではより顕著な特徴となっている (Levinson 2000)。実際のところ、発話が実際に持つ特徴に目を向けず、ただ発話の際の話者の心理状態のみに着目する語用論的研究というのは考え難い。だとすれば、語用論研究において重要となる話者意味の概念とは、発話が実際に持ち、それ以外の行動と区別することを可能にするような特徴に着目し、そうした特徴を伴って可能となるような話者意味を指すはずである。こうした話者意味の概念のもとでは、発話に何ら有意な特徴がない本節の例は、話者意味の事例には組み込まれないだろう。それゆえ、語用論的研究で重要な役割を果たしている話者意味の概念を分析しようと試みるなら、本節で挙げたような例を話者意味の事例に組み込むような直観的判断は有益ではない。

結局のところ、少なくとも理論的に有用な話者意味概念において、話者意味にとっては発話が実際にどのような特徴を持ち、それ以外の行動ではもたらさないどのような事態を生じさせたかということが重要となる。しかし、意図基盤意味論は話者意味をもっぱら話者が持つ意図の内容を特徴づけることで分析しようとするため、発話が現にもたらす何かへの視点が欠けているのである。このことは、前節まで述べてきた意図の無限後退の問題とも無関係ではないだろう。意図の無限後退の問題は、自己言及的意図に訴えない限り、話者の意図をどのように特徴づけようと、より高次の意図が話者に要求されるというものであった。もしも話者意味にとって重要なのが意図そのものでなく、現に発話によってもたらされる事態であるとするならば、その事態こそが問題となった騙し事例を排除する特徴を備えている可能性がある。この場合、反例を排除するのは話者の意図ではなく現に成り立つ事態であるため、さらなる騙し事例が作られることもない。

ここまでのところでは、意図基盤意味論が用いるような内容特定の意図が話者意味にとって十分

ではないということ、騙しの事例と発話の特徴を持たない事例とを論じることで指摘してきた。そして、発話が現にどういった特徴を持つかという観点が必要なのではないかという主張を行った。現状では、まだ内容特定の意図が話者意味にとって十分でないというだけで、必要でないということは論じられていない。これが次節での話題である。

3 内容特定の意図は話者意味にとって不必要である

意図基盤意味論は話者意味にとって必要十分な内容特定の意図が存在すると主張していた。前節で見たのは、第一に意図の無限後退の問題により話者意味にとって十分な内容特定の意図を求めるといふ試みが困難に直面しているということ、第二に発話の実際の特徴に着目せずに話者が持つ意図の内容のみによって話者意味を特徴づけようという考えはそもそも不十分であるということである。本節では、内容特定の意図は単に話者意味にとって不十分であるのみでなく、不必要でもあるということを論じる。それゆえ、内容特定の意図は、話者意味と何らかの関係は持つかもしれないが、しかし話者意味にとって本質的なものでは決してないのである。

意図基盤意味論が話者意味の必要十分条件と見なすような内容特定の意図が関与していないにもかかわらず、確かに話者が何かを意味していると思わせる事例として、聴者が意図されている反応を返す可能性が極端に低い場合を挙げることができる。例えば、私たちは動物に何かを語り掛けることがある。ペットの亀に「餌の時間はまだだよ」と話しかけるひとを考えてみよう。このひとはこの文の発話によって、確かに何かを意味してはいるはずだ。だが、前節で見てきたグライス、シファー、ハーマンのいずれの立場を取ったとしても、対応する内容特定の意図を持ってはいないだろう。というのも、通常の亀は時間概念を含むような複雑な信念を形成するとは思われていないし、もちろんそうしたことにまつわる相互知識*に参加するとも、自己言及的な意図を理解するとも思われてはいないからだ。それどころか、私たちは普通、亀がどのような仕方にせよ時間への言及を含むような命題に、有意味な仕方で反応することを期待してはいないだろう。それでもなお、私たちは亀に向けて何かを語り、何かを意味する。同様の事例は、死者やまだ生まれていない子供への語り掛けといった場面でも見出される。

さらに、話者が自身の意味する命題に対して、いかなる態度も表立って取りたがっていないという例を考えることもできる。これまでの例で出てきた、純と樹里にまた登場してもらおう。純は樹里の財布の中身をこっそり抜き出したとする。樹里は純を疑っているが確信はない。純としてはもちろん、自分がお金を盗んだということを樹里に知られたとは思っていないし、それどころかそうした命題を心に抱いたことさえないと思われていたいと考えている。さて、純は非常な数学好きで、数学の問題に取り組むと熱中しすぎて、聞かれたことには何も考えずについつい本当のことを答えてしまう癖があるとしよう。純を疑っている樹里は、純のこの癖を知ったうえで、数学の問題に取り組んでいる順に「私の財布からお金を盗った？」と聞く。純はきちんと考えることもなく、ほとんど反射的に「うん」と答える。

この事例において、純は「うん」という発話によって、自分が樹里の財布からお金を盗んだということを直観的には意味しているはずだ。だが、もちろん純はグライスやシファー、ハーマンが分析に

挙げるような意図を持ってはいない。純としては、自分がお金を盗ったということを樹里に信じてもらおうと意図などしていないし、そうした意図に対する決定的な証拠の存在が相互知識*となることも望んではいない。だがそれだけでなく、純は自分が樹里の財布からお金を盗んだという命題を、頭に浮かんだこともないものだと思ってもらいたがっていた。それゆえ、純はそうした命題に対するいかなる肯定的な態度も表立って取ろうという意図は持っていなかったのではないか。だとすれば、この場面において、純はおよそいかなる内容特定の意図も持っていなかったと考えることができるように思われる。それどころか、純が本当に何の考えもなしにほとんど反射的に応答をしてしまっただけだとしたら、純には樹里の機嫌を損なわない程度に返事をするという程度以上のいかなる具体的な意図も持っていなかった可能性さえあるだろう。

これらの例が示唆しているのは、もしも意図基盤意味論を維持しようとするならば、上の例における純でさえも持っている内容特定の意図というものを想定せざるを得ず、それは決して容易な課題ではないであろうということだ。そもそも自分が意味した内容に関するどのような具体的な意図も直観的には持っていないと考えられる人物に、それでも帰せられる内容特定の意図というものがどのようなものでありうるのか。これは控えめに見ても困難な問題であろう。もちろんこの問題を解決するために、私たちが持つ意図概念の根本的な修正などを施すことも不可能ではない。だがよりもっともらしい結論は、話者意味にとって対応する内容特定の意図は不可欠なものではないというものであろう。

本節では、意図基盤意味論の主張に反して、内容特定の意図が話者意味にとって不必要であると考えられる根拠を、具体例をもとに見てきた。前節と本節で主張してきたことが正しければ、内容特定の意図は話者意味にとって必要でも十分でもない、非本質的なものとなる。それゆえ、話者意味にとって必要十分となる内容特定の意図の存在を想定する意図基盤意味論は、話者意味を分析するためのフレームワークとしてもっともらしくない。次節では、意図基盤意味論に代わるアプローチがどのようなものであるべきかを素描する。

4 意図から発話そのものへ

これまでの節で、話者意味にとって必要十分となる内容特定の意図の存在を主張する意図基盤意味論が誤っているという議論をしてきた。ひとまず、この主張が正しいとしよう。次なる問題は、意図基盤意味論に代わるどのようなアプローチを、私たちは採用すべきなのかということだ。

これまで見てきた議論からあるポイントが見えてきている。それは、発話そのものが持つ特徴の重要性である。話者意味にとって内容特定の意図が不十分であると示す際に、瞬きをコントロールできないにもかかわらずできると思い込んで瞬きをしようとするひとの例や、誤って聴者を超能力者だと思い込んだ結果、意味を担わない行為と区別できない行為によって何かを意味しようとするひとの例を見た。その節でも述べたように、これらの例は話者が発話によって何かを意味するためには、その発話そのものに他の行為とそれを区別するに足る何らかの特徴が備わっている必要があると考えられる。

亀への語り掛けや、意に反して犯罪の告白をしてしまう純の例からは、逆の結論が引き出せる。こ

これらの事例においては、対応する内容特定の意図は持っていないように思えるにもかかわらず、話者は確かに何かを意味していると考えられるが、そのように私たちが判断する理由は、まさに話者の振る舞いが顕著な特徴を持たない単なるありふれた行為ではなく、それ自体が一定の特徴を備えた発話であるということによるだろう。亀に語り掛けているとき、話者はそれでも言葉を使っている。意に反して犯罪の告白をするとき、純は背伸びをするなどのような振る舞いではなく「うん」という発言をしていた。むろんこのことは、言語的な要素が話者意味にとって本質的であるということではない。純は「うん」という代わりに、単に頷くことだってできただろう。そうではなく、重要なのは、これらの例においては、何かを意味する発話として捉えない限り合理的に理解できない行動がなされているということである。そして、そうした行動がなされる限り、対応する内容特定の意図を持つまでもなく、話者は何かを意味するのである。言い換えれば、話者がある行為によって何かを意味することと、話者によるその行為が何かを意味するものと捉えない限り合理的に理解できないような特徴を備えているということとのあいだには、双条件が成り立つものと考えられる。話者意味に関わる行動とそうでない行動を分けるのは、それが話者意味に関わるものと理解する以外にない振る舞いであるか、そうでないかということである。犯罪を問われたときに純が行ったのがただの背伸びであったなら、純はそれによって犯罪を告白したことにはならなかっただろう。というのも、背伸びは何かを意味するためのものと理解するまでもなく、単に体が凝っていたから伸ばしただけのものとして理解可能であるからだ。

こうしたことから、今後の話者意味の分析が注目すべき事柄がわかってくる。私たちが目を向けるべきは、発話の際に話者が抱いている意図ではない。むしろ話者意味に関わる発話が、そしてそのみが共有する特徴とは何かということだ。言い換えれば、私たちは話者の意図ではなく発話そのものへと目を向けなければならない。それゆえ、話者意味の分析は次のような一般的な形式に沿って探求されるべきだろう。

話者 S は x を発話することで p ということの意味する iff x は..... p である

つまり、話者が意味する命題に関与するような何らかの特徴を発話は備えていると想定し、それがどのような特徴であるのかということ进行分析すべきである。この際に話者の心理に関する言及はあってもよいし、おそらく必要となるだろうが、あくまでそれは発話それ自体が持つ特徴を定義するために用いられなければならない。話者が単に何らかの心理を持っているだけでは、話者が何かを意味することにはならない。こうした形式に則った分析が具体的にどのようなものとなるかは、これからの研究を俟たねばならない。

5 おわりに

意図基盤意味論は、話者意味にとって必要十分となる内容特定の意図の存在を前提としていた。本稿で主張したのは、話者意味にとって必要な内容特定の意図も、十分な内容特定の意図も存在しないということである。そのうえで、最後に今後の話者意味の分析が話者の意図ではなく、発話そのものの持つ特徴へと目を向けるべきであるという示唆を与えた。それが具体的にどのようなものとなる

かはまだ明らかではないが、しかしこの示唆はそれでも話者意味の分析が意図基盤意味論から離れて進むべき道への第一歩となるであろう。

謝辞

本稿は JSPS 特別研究員奨励費（課題番号 13J00209）の助成を受けたものである。

参考文献

- [1] Azzouni, J. (2013), *Semantic Perception*, Oxford University Press, Oxford.
- [2] Davies, W. A. (2003), *Meaning, Expression, and Thought*, Cambridge University Press, Cambridge.
- [3] Grice, P. (1957), 'Meaning', reprinted in Grice (1989): pp. 213-223.
- [4] — (1967), 'Utterer's Meaning and Intentions', reprinted in Grice (1989): pp. 86-116.
- [5] — (1982), 'Meaning Revisited', reprinted in Grice (1989): 283-303.
- [6] — (1989), *Studies in the Way of Words*, Harvard University Press, Cambridge.
- [7] Harman, G. (1974), 'Review of *Meaning* by Stephen R. Schiffer', *The Journal of Philosophy*, 71(7): pp. 224-229.
- [8] Kissine, M. (2013), *From Utterances to Speech Acts*, Cambridge University Press, Cambridge.
- [9] Levinson, S. C. (2000), *Presumptive Meanings*, The MIT Press, Cambridge.
- [10] Neale, S. (1992), 'Paul Grice and the Philosophy of Language', *Linguistics and Philosophy*, 15: 509-559.
- [11] Schiffer, S. (1972), *Meaning*, Oxford University Press, Oxford.
- [12] Searle, J. R. (1980), 'The Intentionality of Intention and Action', *Cognitive Science*, 4: 47-70.
- [13] Sperber, D. & Wilson, D. (1995), *Relevance (2nd edition)*, Blackwell Publishing, Oxford.
- [14] Strawson, P. F. (1964), 'Intention and Convention in Speech Act', reprinted in Strawson (Ed.) *Logico-Linguistic Papers*, 1971, Ashgate Publishing, Aldershot.

著者情報

三木那由他（日本学術振興会特別研究員（PD）／日本大学 nyt.miki@gmail.com）